

けんがむ+

東日本大震災からの復興をめざす宮城県で、真っ白い綿が収穫されている。津波をかぶった土地で綿花を栽培し、製品をつくって売る「東北コットンプロジェクト」の試みだ。本業を生かして農家を応援する企業は70社。ブランドとして確立させようとしている。

宮城県東松島市の丘陵地で3日、綿花の収穫があった。約60坪の畑で等間隔に並ぶ高さ80センチほどの木に白い実がはじけている。やわらかな綿花を、約20人のボランティアが摘み取った。東京都から訪れた井上康一さん(45)は包装用品メーカー「バックタケヤマ」の営業担当。東北コットンの茎を使った紙製の手提げ袋などを売っている。収穫への参加は3年目。「復興を実感できる楽しい時間です」

農園を営む「イーストフアームみやぎ」代表の赤坂芳則さん(67)が、被災地で

綿花がつむぐ再起の糸

復興支援

上

宮城の農家 70社と挑むブランド化



①被災地に育ったふわふわの綿花を収穫した＝2017年11月、宮城県東松島市
②コットンボール＝15年10月、同県名取市、いづれも写真家・中野幸英さん撮影



綿花栽培を始めたのは震災3カ月後の2011年6月。津波で耕作ができなくなった仙台市荒浜地区の農地で、塩害に強い綿の栽培を持ちかけられた。

提案したのは、アパレルメーカーや紡績会社など10社。国内で綿花を育て、紡績や製品化を各社が分担し、被災地を応援する狙いだった。「全量を買収して製品にして販売する。農

家の雇用を応援したい」。大正紡績(大阪府)などからの申し出に、赤坂さんは困惑した。綿の木さえ見たことがなかったからだ。でも「ダメでもともと」。覚悟を決め、近くの農家と挑戦を決めた。

11年秋からの収穫期は約70日しかとれなかった。赤坂さんは13年、荒浜は仲間任せ、宮城県東松島市へ移転。復興工事に使われた

土砂の採取跡地に綿の種をまいた。当時、近くの仮設住宅で暮らす人たちが何人も手伝ってくれた。仮設を出た後も収穫に顔を出してくれる人もいる。東松島では昨年から今春にかけて数百トンを収穫できそうだ。赤坂さんは「大勢の人に支えられ、やめるわけにはいかない」。

収穫された綿は全量を大正紡績が綿糸に加工。アパレルメーカーなどが製品化し、販売する。11年に10社で始まったプロジェクトは「東北コットンプロジェクト」と名付けられ、参加企業は70社に広がった。

「天衣無縫」のブランド名でオーガニックコットン製品を販売する新藤(横浜)市は、東北コットンを使ったタオルなどを販売。学生時代を仙台で過ごした藤澤徹社長(70)は「日本で初めて綿花栽培が東北に根付き、顔の見える関係が築ければ、新たな事業モデルになる」と語り、新製品を毎年発表する。

高島屋は東北コットンを使った商品を売るほか、14～16年には被災地から種を譲り受け、東京・日本橋店の上で綿花を育て、収穫

祭も開いた。日本航空は機内誌で定期的に事業を紹介。通販大手フェリシモは東北コットンを使ったアクセサリーを売り出した。

東北コットンはいま、荒浜と東松島のほかに宮城県名取市でも栽培されている。3カ所の収穫量は2年続けて計1ト近くになりそうだ。日本最大級の産地とうたうまでになった。

課題も見えてきた。震災の記憶が薄らぐ中、被災地事業への関心が低くなることを心配するメンバーは少なくない。参加企業や製品を賣る場所が東北に少ないことも気がかりだ。

プロジェクト事務局長の江良慶介さん(41)は「プロジェクト(事業)からプロダクト(製品)へ」と脱皮を唱える。東北を応援する消費者の気持ちに寄りかからず、製品の魅力を高めたいという思いだ。幅広い製品をそろえて「東北コットン」のブランド価値を高める方法を探ってゆく。

(小室浩幸)

東日本大震災からまもなく7年。復興に取り組み現場と応援する企業を2回にわたって報告する。